

## 第十四章 聖霊なる神・人格

### I 聖霊の人格の重要性

聖霊の学びをするとき、その人格を特に強調しなければならないのは、御霊が自分から語ったり、自分について語ることをせず、聞いたことを語り（ヨハネ 16：13、使徒 13：2）、またキリストに栄光を帰すために世に来られたと言われているからである（ヨハネ 16：14）。聖霊は、御父や御子のようにご自分の意志をもってご自分から語られることをされない故に、その人格がよけい非現実的に見られやすい。その結果、ニカイヤ会議（325年）においてやっと、教会の信条の中で、聖霊が一人格として認められたのであった。その後、正統的な教理が定義されて、「神は三つの人格—御父、御子、御霊—として自存あるいは存在する。」という聖書の真理が一般的に認められるようになった。

### II 聖書に示された聖霊の人格

1、御霊は人格を持つ者だけに可能な事柄をしておられると言われている。

- ①御霊が来ると・・・認めさせる。（ヨハネ 16：8）
- ②御霊は教える。（ヨハネ 14：26、参照；ネハ 9：20、ヨハ 16：13-15、Iヨハ 2：27）
- ③御霊は語る。（ガラ 4：6）
- ④御霊はとりなす。（ローマ 8：26）
- ⑤御霊は導く。  
（ガラ 5：18、参照；使徒 8：29、10：19、13：2、16：6-7、20：23、ロマ 8：14）
- ⑥御霊は任命する。（使徒 13：2、参照；使徒 20：28）
- ⑦御霊も任命を受けている。（ヨハネ 15：26）
- ⑧御霊はさまざまな働きをする。（ヨハ 3：6 [新生]、エペ 4：30 [証印]、5：18 [満たし]）

2、御霊は人格として他の存在から働きかけを受ける。

- ①御父および御子から世に遣わされた。（ヨハ 14：16、26、16：7）
- ②人は御霊を痛ませ（イザ 63：10）、悲しませ（エペ 4：30）、消し（Iテサ 5：19）、冒瀆し（マタ 12：31）、欺き（使徒 5：3）、悔り（ヘブ 10：29）、御霊に逆らうことを言う（マタ 12：32） ことがありうる。

3、御霊に関するすべての聖書の用語は人格性を暗示している。

- ①御霊は「もうひとりの助け主」と呼ばれている。（ヨハ 14：16-17、26、16：7）
- ②御霊が霊と呼ばれるのは、神が霊であると同じ、人格的な意味においてである。
- ③御霊に用いられる代名詞が人格性を示唆している。（ヨハネ 14：16-17、16：7-15）

### III 神の一位格として、御霊は御父および御子と同格である

- 1、御霊は神と呼ばれている。（IIコリ 3：18、使徒 5：3-4）
- 2、御霊は神の属性を持っておられる。（Iコリ 2：9-11、ヘブ 9：14）
- 3、御霊は神のみ業を行う。（使徒 20：28、Iコリ 12：8-11、IIペテ 1：21）
- 4、御父、御子と同格の人称代名詞が用いられている。
- 5、御霊は個人の信仰の対象として提示されている。  
（詩 51：11、マタ 28：19、使 10：19-21）